2010. 6. 6 (日)

読売

評・井上 寿一（日本近現代史家）

国際連盟 世界平和への夢と挫折

篠原初枝著

今なぜ国際連盟の歴史を振り返る必要があるのか？ 日本の国際連合外交を考える際の重要な手がかりを得られるからである。国際連合が国際連盟と同様に、国民国家の国際組織である以上、問題は「古くて新しい」。

国際組織と国民国家との間で均衡を保ちながら、国際協調の普遍的な価値の実現を図るためにはどうすべきか。

本書は国連の経済・社会分野における積極的な貢献を示唆している。なぜならば、これらの分野で成果を上げた国際連盟が国際連合の「現在につながる制度や仕組みを作った」からである。

他方で国際的な集団安全保障の分野では、国際連盟の挫折の歴史を踏まえれば、国連といえども過大な期待をすることはできない。

以上の示唆を与える本書の記述は、エピソード（たとえばリットン調査団の満鉄食堂車のメニューなど）と人物中心（日本人も活躍している）で読みやすい。

国際組織の歴史的な発展を信じる、まっすぐな研究姿勢が生んだ本書は、世界平和への希望を思い起こさせる。すがすがしい読後感だった。（中公新書、800円）

『読売新聞』2010 年 6 月 6 日

国際連盟

篠原初枝

中公新書・840円

戦後に設立された国連の前身には「国際連盟」があった。第一次、第二次世界大戦の間に構想された組織だった。国際政治秩序維持を担おうと理想に燃えるも、徐々に現実に押しつぶされ、機能不全に陥った。この先駆的な機関について、表も裏も含めて通史を描いてみせたのが本書。常任理事国に就き大国として遇された日本は、孤軍奮闘したり空回りを繰り返しながら、満州事変を機に脱退。右往左往するその姿は、現代の日本外交を考える上でも示唆に富む。一方で、事務次長を務めた新渡戸稲造ら国際派の活躍ぶりには胸がすく。

『週刊新潮』2010 年 7 月 29 日